

「マイナースポーツの聖地」創出による地域活性化  
～香川県多度津町をモデルケースとして～

一橋大学 岡本ゼミ チーム I

○大島 万奈 隈井 亮太 早坂 拓人

## 1. 緒言

総務省が 2017 年に作成したデータによると、日本の三大都市圏の人口が総人口に占める割合は年々増加しており、1955 年に 37.2%だった三大都市圏の人口割合は 2005 年には 50%を超え、さらに 2050 年には 56.7%になると推計されている。これは都市部への人口の集中と地方の過疎化が同時に進むことを示唆し、特に衰退する地方の課題は深刻である。

本研究では、「マイナースポーツの力を活用することで、地方の交流人口を増やし、地域の活性化を促す」という提言を、香川県多度津町をモデルケースとして行う。

## 2. 提言の背景

### (1) 深刻な過疎化と解決へのアプローチ

#### ア. 人口減少が与える悪影響

総務省統計局の「人口推計（平成 29 年 10 月 1 日現在）」の都道府県別の人口増減率によると、増加は 7 都県のみであり、その他 40 の道府県では減少となっており、人口減少に直面している地方が多い。

国土交通白書(2015)では、人口減少が地方のまち・生活に与える主な影響として、生活関連サービスの縮小、税収減による行政サービス水準の低下、地域公共交通の撤退・縮小、空き家・耕作放棄地等の増加、そして地域コミュニティの機能低下が挙げられている。また人口減少による経済・文化面の衰退や生活利便性の低下、雇用環境の悪化は、さらなる人口減少につながると考えられる。この負のスパイラルに陥らないためには、地域経済を活性化する必要がある。

#### イ. 交流人口への着目

「定住人口」とはその地域に住む人の数を指し、「交流人口」とはその地域に住んでいないが、観光やレジャーなどの目的で訪れる人の数を表す。総務省の「平成 27 年度版情報通信白書」には、「地域経済を活性化するためには、人口を回復・増加させることが必要であるが、それには一定の期間が必要となるため、地域外からの旅行者や短期滞在者による「交流人口」を増やすことが注目されている。」と記されている。これは、地域の交流人口が増加すれば宿泊や食事、土産品の購入等による消費が期待されるからだ。上記から、地方の衰退を食い止めることは日本の重要課題であり、交流人口の増加はそのための有効な手段であると言える。

#### ウ. マイナースポーツの活用

「交流人口」を増加させる上で、我々は、大会や合宿などのスポーツイベントの誘致による集客力・経済効果に目をつけた。さらにここでのスポーツを、マイナースポーツに絞った。なぜならニッチであるマイナースポーツの活用は、衰退する地方にとって、地域に安定して人を呼び込むための独自性の強いコンテンツを生み出すことに繋がり、スポーツの認知度向上と競技人口の増加を望むマイナースポーツの協会にとっては、スポーツ普及の拠点やきっかけを得ることを意味し、双方にとってメリットがある。さらに競技者にとっても、他の競技者との交流機会が大変貴重であり、スポーツイベントに参加する動機は十分ある。よってマイナースポーツの活用は、スポーツイベントに関わる「地方」、「スポーツ協会」、「競技者」それぞれにとってメリットがあるのだ。

マイナースポーツによる地域活性化を考える上で、以下の成功事例を参考にした。

## (2) 成功事例

### ア. 大会誘致による「聖地化」 -熊野市におけるソフトボール-

和歌山県熊野市では、昭和 48 年に全国高校総体男子ソフトボール大会、昭和 52 年に全日本大学ソフトボール選手大会などを誘致したこともあり、大学のソフトボールチームの合宿などが行われる、ソフトボールの聖地となった。特に毎年行われている熊野ソフトボールキャンプでは、ソフトボール強豪国の元選手や指導者など 50 名ほどの講師が、全国から集まった 1000 名近い参加者を指導し、国内最大規模となっている。また、このキャンプ以外にも毎年複数回の大会が開催されている。熊野市の調べによると、平成 18 年度においてはこれらの大会だけでも年間の宿泊数は約 7000 泊となっていて、大会開催により個々のチームの合宿につながるケースもあり、ソフトボールの集客は年間 9000 泊を超えている。熊野市は大会誘致をきっかけとして、熊野スタジアムを聖地化することに成功したのだ。

### イ. 継続開催を支える地域住民 -宮古島におけるトライアスロン-

沖縄県宮古島市で行われる「全日本トライアスロン宮古島大会」は、2018 年で 34 回目を迎え、毎年国内外から 1500 名以上の参加者が集う。大会前後は選手の家族や仲間も含め 6000 人以上が島に滞在し、飲食店などで消費を行うため、この大会の経済効果は 3~4 億円にのぼるとされる。これほど大規模な大会の成功のカギは、島民の協力である。この大会に対する地元住民の意識は高く、大会を支える約 5000 人のボランティアのほとんどは島民であり、大会前日には島の女性たちが入賞者用の花冠を作成し、当日には沿道で学生ブラスバンドの応援も行われる。島をあげての協力・応援が参加者を魅了し、その結果参加者の満足度の高い大会となり、大きな経済効果を生んでいるのだ。大会や合宿を継続的に安定して行うためには、このように地元の理解・協力が必要である。

## 3. 提言

### (1) 全体フレーム

前述のア、イの成功事例から、スポーツによる地方活性化には、以下の3点を踏まえる必要がある。

#### ア. マイナースポーツの「聖地」創出

地域が「スポーツの聖地」となるためには、優秀な指導者・ライバルが集まっている、施設が充実している、そのスポーツの発祥地である、有名アスリートのゆかりの地であるなどの要素がある。そしてこれらの要素を活用することで、競技者が憧れを抱く場所、つまり「スポーツの聖地」になる。さらにマイナースポーツでは、聖地が確立されていないケースが多く、「聖地化」がメジャースポーツに比べて容易である。

#### イ. 地域住民の協力体制

地方において、スポーツイベントの運営を行うにあたって、欠かせないのが地域住民のサポートである。大会が大規模になるにつれ、大会自体の運営スタッフ、食事処や宿泊施設のスタッフなど、沢山の人員が必要となるため、地域住民の参加が重要だ。またその際、スポーツ団体と地元住民の仲介役として、「官民一体のリーダー組織」を設立し、そこが外部との「窓口」の役割も果たすのが望ましい。

#### ウ. スポーツイベントの通年開催

競技者内での認知度の高まりや、地域住民の協力体制のノウハウが蓄積してきた後には、持続的な効果を地域に落とし込むため、イベント頻度を高めなければならない。例えば、現在多くのスポーツにおいて、大会が一定期間に集中しており、年間を通じた盛り上がりがない。これを改善するために、大会をカテゴリー別に編成し、開催時期を分散させるなどの方針を取ることで、一年中安定して盛り上がり、地域活性化に繋がる。

### (2) 「少林寺拳法」を活用した多度津町での政策

少林寺拳法は世界競技人口が約150万人存在するが、認知度の低いマイナースポーツである。発祥地である香川県多度津町は人口減少に悩んでおり、地域活性化に取り組む姿勢は高いが、方針は模索中である。また多度津町にある金剛禅総本山少林寺には、少林寺拳法協会の本部があるものの、全国大会や講習会などのスポーツイベントは都市部で行われているため、年間を通して外部から人が集まる仕組みが整備されていない。よって現状として、少林寺拳法の総本山の存在が、多度津町の地域活性化に与える影響は小さい。そこで私たちは、上記のフレームを踏まえ、少林寺拳法の「聖地」である多度津において、カテゴリー別の全国決勝大会を中心とした年間イベントを作り出し、少林寺拳法と多度津町の連携による、長期的で持続可能な地方活性化策を提言する。

#### ア. 「発祥の地」を活かしたスポーツイベント

「発祥の地」は、競技者にとって「聖地」の一つとなる。総本山少林寺の施設は、とても整備されているが、全国に向けたスポーツイベントを開催できておらず、「発祥の地」というブランド力を生かしてきれていない。そこで少林寺拳法の上級範士による指導や、多度津でしか体験できない修行プログラムを創設する。これにより、「聖地」としてのブランド

価値が向上することが見込まれる。

#### イ. 「まねきねこ課」を中心とした地域住民の協力体制

少林寺拳法協会は、現在地域住民との協力体制を構築が出来ていない。ここで活用したのが、多度津町の観光振興団体である「まねきねこ課」である。これは設立から数年しか経っていない組織であるが、町役場職員や少林寺拳法職員、地元住民の代表者などが構成員となり、タウンプロモーションの中心となっている。このようなリーダー組織を中心として、受け入れ態勢の準備や大会を開催することのメリットを地元住民に伝え、旅館や宿坊を活用した宿泊施設や食事の提供ボランティアを確保する。

#### ウ. カテゴリー別の全国決勝大会と合宿

現在少林寺拳法では、小学生～大学生、そして一般の部の全国大会が8～11月に集中しており、冬季～春季にかけては大会がないのが現状である。この大会を年代別に再編成し、それぞれの大会の開催時期を分け、決勝大会を多度津で行うようにする。さらに拳士交流を目的とした合宿も企画する。これにより年間を通じて、多度津に拳士が集うようになる。

### (3) 汎用性

上記のフレームを利用して、衰退する地方で、あるマイナースポーツの「聖地」であるというプレミア感を演出することができれば、その地域で年間を通じて合宿や大会を開催できるようになり、それが人の呼び込みや宿泊につながり、地域活性化をもたらすと考えられる。そこで、我々は合宿や大会などのイベントが、単発で終わらずに継続的に続いていくための方策を考えた。上記のフレームは構造化されており、多度津町で適用したように考えれば、様々なマイナースポーツと地域において、汎用性が高いと思われる。

#### <参考文献>

「熊野市とソフトボール」

<http://tsushosoftballno1ouendan.web.fc2.com/news/kumanotorikumi/newpage5.html>

国土交通白書 2015年度版 <http://www.miyakomainichi.com/2017/08/101684/>

少林寺拳法公式サイト <https://www.shorinjikempo.or.jp/>

総務省 「人口推計（平成29年10月1日現在）」

<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2017np/index.html>

総務省 平成27年度版情報通信白書

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc233100.html>

たどり着く多度津町 <http://tadoritsuku-tadotsu.jp/>

東洋経済 ONLINE 2018年5月29日 「『宮古島トライアスロン』知られざる経済効果」

<https://toyokeizai.net/articles/-/222433?page=2>